

「今後の県立高校に関する地域検討会議（第2回）」記録要旨

【盛岡ブロック① 盛岡市、滝沢市、紫波町、雫石町】

平成27年8月7日（金）

岩手県公会堂 2階 26号室

【坂井 雫石町立雫石中学校PTA会長】

- ・校舎制の説明をしていただき統合する際は、こういう方法もあるということを知ることができた。資料によると、およそ30分以内の移動が原則となっているようだが、盛岡ブロックは広い範囲に高校が存在している。1時間以上の移動時間がかかっても校舎制を導入することが可能なのか伺いたい。

【県教委】

- ・生徒や教員の移動時間のことを考慮すると、あまり移動に時間がかかる高校間での校舎制は難しいと考えている。実施にあたっては、例えば専門学科で普通教科の授業をまとめて実施する等の工夫をしていくことが必要となる。

【吉川 雫石町教育委員会教育長】

- ・校舎制を検討する段階で、ある学校では校舎制とすることを認めても、ある学校が難色を示した場合どのようにするのか。

【県教委】

- ・校舎制は、統合する場合、施設設備の有効活用という観点から検討しているもので、実施にあたっては、地域や学校の意見を十分伺ったうえで検討していくことになる。

【佐野峯 滝沢市副市長】

- ・中学生へのアンケートを実施しているようであるが、アンケートの詳しい内容と公表の方法について教えていただきたい。
- ・高校入学後の中途退学者の状況について、わかる範囲で教えていただきたい。

【県教委】

- ・中学生へのアンケートについては、7月末までに実施していただくよう県内の各中学校にお願いしたところ。現時点で約9割の中学校から回答をいただいております。県教委で集計作業を進めています。調査の内容は、中学校卒業後の進路とその理由、高校進学予定者の希望学科、高校への通学範囲と時間、学校の規模、高校卒業後の進路等10問としている。平成20年12月に実施した方法とあまり大きく変えないようにとの配慮から、県内の165校、約4500人に対して抽出調査を実施し、抽出率は40%弱となっている。公表については、平成20年12月に実施したアンケートとの対比ができるように、ブロック毎に中学生が希望する学科等について取りまとめたいと考えている。次回の第3回地域検討会議では、その結果についてお示ししたい。
- ・高校入学後の中途退学者の状況について、全日制における中途退学者は平成19年度は413人で、中退率は1.22%、平成25年度は220人で中退率は0.76%となっており、減少傾向となっている。中途退学の理由は、学校不適応や進路変更が多い状況となっている。

【佐藤 盛岡市副市長】

- ・葛巻町や岩手町の周年行事に出席する機会があった。その行事の中で葛巻高校や沼宮内高校は地域の伝統文化を紹介していた。地域の伝統文化を継承していくためには、地元の高校は欠かせない存在であり、また地域の人材育成や発展のためには地域の高校は必要であると考えている。（次頁に続く）

- ・地域との連携を考える場合、地域と高校と大学との連携ができないか提案したい。盛岡市では産学官連携として、岩手大学や岩手県立大学と連携している。岩手県立大学とは盛岡市まちづくり研究所を設けて、そこに職員を派遣し連携している。大学生が地域に入ることにより、高校生の地元大学への理解が深まり、地元大学への進学を考えるきっかけになるかもしれない。大学を活用することにより、地域と高校生、大学生の交流が生まれ、より地域理解が深まっていくのではないかと考えている。

【和田 紫波郡校長会会長】（矢巾町立矢巾中学校長）

- ・資料の中に島根県の海士町の取り組み事例が示されていたが、この事例に学ぶべきことは多い。岩手県でも沿線以外の高校は、県立ではあるが地域に根ざした高校が多い。こういったことを考慮していただき岩手県らしい高校再編をお願いしたい。
- ・貧困が原因で高校に進学できない中学生が少なからずいるという実態を理解していただきたい。貧困家庭への援助や支援について、市町村単位でのこととは思いますが、検討をお願いしたいと考えている。

【県教委】

- ・県では、様々な奨学金や沿岸被災地の生徒に対する「いわての学び希望基金」等で支援を実施しているところ。今後とも、これらを活用しながら学ぶ機会の確保に努めてまいりたい。

【杉本 盛岡市中学校長会会長】（盛岡市立松園中学校長）

- ・子どもの貧困については、所属している中学校でも深刻な問題となっている。母子家庭の割合が高く、そうした家庭への支援策を考えていただきたい。
- ・特別な支援を必要とする生徒への対応については、数が極端に増えているわけではないが、重要な課題であると認識している。すでに小規模の高校では、特別な支援を必要とする生徒に対して手厚い指導を行っていると聞いている。高校再編にあたっては、特別支援学校の高等部と連携を検討する等、もう少し踏み込んだ形の取り組みがあればよいと感じている。
- ・種市高校の海洋開発科は潜水技術を学ぶ全国唯一の学科である。専攻科も含めながら全国から募集することはできないものかと考えている。下宿先の課題もあるが、ぜひ、特色ある学科に対して支援し全国にもPRしていただきたい。

【県教委】

- ・特別な支援を必要とする生徒に対しては、障がいの程度によるが高等学校でも可能な限り受入れを行っている。また、いわて特別支援教育かがやきプラン推進事業で、特別支援教育支援員を各学校に配置し、授業等で支援を行っている。高校と特別支援学校との連携については、現在、釜石高校に釜石祥雲支援学校の高等部を、平成 28 年度からは福岡工業高校に、みたけ支援学校高等部分教室を併設する予定であり連携に努めている。

【県教委】

- ・県外から本県の県立高校を志願する場合は、本県への一家転住が条件となっており、県境隣接（地域県立高等学校入学志願取扱）協定以外の地域では、他県からの志願は難しい。葛巻町では山村留学制度を立ち上げ、町が他県から葛巻高校を志願する生徒の受入態勢を整備することで、一家転住と同様の扱いとし全国からの募集を可能とした経緯がある。他県からの葛巻高校への入学者は現在 1 名であり、全国からの募集を呼びかけたとしても直ちに成果を出すのは厳しいところもある。
- ・現在県内には、ものづくり産業の人材育成を目的とした専攻科を黒沢尻工業高校に、農業の担い手育成を目的とした特別専攻科を盛岡農業高校に、海技士の資格取得を目的とした専攻科を宮古水産
(次頁に続く)

高校に設置している。種市高校の海洋開発科は高校在学中に潜水士の資格を取得できることになっており、卒業後の進路等も考慮すると仮に種市高校に専攻科を設置する場合、どのようなことを目的として設置するのか十分検討しなければならず、直ちに設置することは難しいと考えている。

【千葉 盛岡市教育委員会教育長】

- ・高校の魅力づくりについて、普通高校では大学進学等の実績が学校の魅力につながると考えるが、専門高校や総合的な専門高校の魅力づくりをどのように考えているのか伺いたい。
- ・岩手の高校教育の目指すものとして、自立した社会人としての資質を有する人財（生徒）の育成となっている。それぞれの地域の発展に貢献する人財の育成は大変大事であり、高校教育の果たす役割は一層重要になってくると思う。小中学校でもキャリア教育を推進し、将来の職業について考えさせる指導を行っている。学校教育の中で勤労観、職業観を培っていくことが大切であると感じている。

【県教委】

- ・専門高校の魅力としては、まず社会に役立つ専門的な分野を学習している点にある。また、それぞれの専門分野を生かしてそれぞれの地域で活躍できる人材を育成していること、地域と連携した商品開発を行っていること等が大きな魅力になっていると思う。こういったことが十分地域の方々に伝わっていない面があるのでPRに力をいれていきたい。現在、夏季休業中を利用して、各高校の一日体験入学を実施し、それぞれの高校の学習内容や部活動等の特長について、中学生に対し説明を行っている。その他にも各学校の文化祭や中学校での高校説明会を通じて、各高校の魅力について発信する機会を設けている。普通高校にしても専門高校にしても基礎・基本をしっかり身につけさせ、社会に役立つ人財として送り出すことが一番の魅力にならなければならないと感じている。人間形成という意味では、部活動は重要であり、目覚ましい実績を上げることができなくても、地道な活動を通して人を育てているということを御理解いただきたい。

【侘美 紫波町教育委員会教育長】

- ・紫波町は交通の便に恵まれており、中学生の3分の2が町外の高校に進学している。紫波総合高校には3分の1の生徒しか進学していないが、紫波町の地域創生会議の中で紫波総合高校の魅力づくりについて話題にあがっている。具体的には、紫波町以外の地域から紫波総合高校に入学してきた生徒達が、紫波総合高校で学んだことにより紫波町に魅力を感じ、将来紫波町で生活しようと考えたり、町に貢献しようと考えたりする人材を育成できないか、紫波総合高校がそのような役割を担うことができないかということである。
- ・平成26年から紫波町の小学校が文部科学省の英語教育強化地域の拠点校となっている。それに併せ中学校のカリキュラム開発も進めることとしている。さらに、文部科学省の指定の趣旨には、地域の高校との連携も取り入れるようになっている。紫波総合高校は進学校ではないが、このような事業を通して小中高を通じた連携が出来ればと考えている。

【県教委】

- ・小中高の連携については、市町村の御理解と御協力をいただき各地域で進められていることに感謝申し上げる。学校教育室でも今年度から学力・復興教育担当という部署を設置し、小中高と連携し学力向上に向け取り組んでいるところである。

【阿部 滝沢市商工会会長】

- ・ILCの誘致を前提として話をさせていただく。ILCが本県に誘致された場合、国際的な視野を持った人材の育成や、物理分野の専門家を育てる教育環境の整備は必要と考えている。また、就職
(次頁に続く)

まで見据えた場合、高校、地元大学、地元企業との連携がますます重要になってくるのではないかと。

- ・校舎制については、運用面についての課題はあると思うが、生徒の教育機会の保障等を考慮すると検討に値するのではないかと考えている。

【富岡 紫波町商工会副会長】

- ・紫波総合高校は、夏祭りのボランティア活動や、インターンシップで地域との連携を深めている。地域の活性化のためには、地域の企業に長く務めるような人材の育成が必要であり、そのような人材を育成する地元の高校は必要である。今後の高校再編にあたっては、このような視点を大切にしていって検討を進めていただきたい。
- ・統合を進めるにあたり、校舎制を検討していくことは理解できるが、古くなった校舎を維持管理していくのは県としても大変ではないか。市町村に最低一つの高校は残し維持していった方がよいのではないかと考えている。

【松本 日専連盛岡理事長】

- ・地元の学校で学ぶことにより、地域に貢献しようとする意識が芽生え地域への愛着が生まれるものとする。一旦県外の大学に進学したとしても地元就職したり、日本や海外で活躍していても地域のことを忘れない、そういう人材を育成すべきである。地域の中で子ども達を育てていくことはとても大切な要素である。少子化に伴い小規模校の魅力をいかに高めていくかということから、地域との連携の話が出てきたものと思っているが、そうではなく、地域との連携の在り方についてはもっと前から考えていくことではなかったか。
- ・地域との連携は、歩いたり自転車で学校に通うことで、挨拶等をかわし地元の方々と交流することからはじまる。統合等により通学の便が悪くなった場合、スクールバスを利用することになると思うが、スクールバスで通学するとなると、自分の住んでいる地域をただ素通りすることになり、通学することは出来るが挨拶を通じた地域との交流等、大切なものを失ってしまうような気がする。統合等により、仮にそのようになったとしても出来るだけ、挨拶等地域との交流を無くさないような地域づくりをしていきたい。

【中村 盛岡市PTA連合会事務局長】

- ・通学マナーについては、以前に比べかなり良くなってきているとの話をPTAの方々からいただいており、高校での指導が着実に高まっていると感じている。ただ、盛岡市少年センターの職員によると、補導件数についてはあまり減っていないということである。高校教育の充実に併せ、先ほどから話のあった保護者の貧困や特別な支援を必要とする生徒への対応等、様々な課題をしっかりと捉えて高校再編を進めていくことが大事ではないかと考えている。
- ・盛岡ブロックの高校入試における不合格者はどれくらいいるのか。また、不合格になった生徒で私立高校にはどれくらい入学しているのかがわかれば教えていただきたい。

【吉川 雫石教育委員会教育長】

- ・学校の規模が小さくなれば、教育の質の保証が難しいとのことであったが、地元では小規模になったとしても高校を無くさないでほしいという意見が多い。昨年のブロック別懇談会でも話したが、各市町村に県立高校1校はほしいという考えに変わりはない。
- ・前回の高校再編では、統合の基準はあったと記憶している。今回はまだ統合の基準が示されていないが、今後、統合に係る基準を示す考えはあるのか伺いたい。

(次頁に続く)

【県教委】

- ・校舎制については、本校に対する分校という考えではないということをまず御理解いただきたい。校舎制を導入するにあたっては、校舎間の距離等を考慮し検討していくこととなる。
- ・統合の基準については、極端に生徒が減少し、高校教育として望ましい教育環境の確保が困難となるような場合には、いずれその基準を検討しなければならないと考えている。

【井上 滝沢市立一本木中学校PTA会長】

- ・高校再編については、PTA関係者の多くは良く理解していないと認識している。盛岡ブロックということもあり、生徒がある程度いるということから、まだ、現実として受け止めていないのではないか。学力が伴わないことにより、希望する高校への進学が叶わないということはやむを得ないと思うが、保護者の貧困等で高校に進学できないということは避けなければならないと考えている。何らかの手立てを検討していくことは必要であろう。
- ・盛岡ブロックには、様々な校種の高校があり、選択肢が多すぎることから生徒の高校に対する愛着がないのではないかとという声も聞いている。地域の小規模校では地域と密着した活動を行っており、生徒は地元への愛着心が強い。高校の選択肢が多いことは良いことではあるが、高校再編にあたってはこのような実績のある小規模校への配慮が必要と考えている。

【坂井 雫石町立雫石中学校PTA会長】

- ・地元に住んでいるが、雫石高校のことはよくわからないことが多い。地元の高校の存続を考えたとき、雫石町には中学校は1校しかないので、中高一貫教育校としてはどうか。また、校名を変更することも一つの方法ではないかと考えている。
- ・小規模校は生徒の切磋琢磨の機会が少ないという説明があった。雫石町でも小学校の統廃合を進めているが、少人数ながらも切磋琢磨し頑張っていると聞く。小規模校だから切磋琢磨の機会が少ないということには少し違和感を持っている。

【熊谷 滝沢市教育委員会教育長】

- ・高校も大学も地域との連携をするようになったと感じている。これは、生徒の減少で再編を行うようになってから、地元高校の存続のため高校の魅力づくりを積極的に進めようと努力してきたからではないか。高校の魅力づくりに頑張っている校長先生方に感謝申し上げる。
- ・中学生へのアンケートについて、前は12月であったが、今回は7月の実施ということで、より生徒の気持ち伝わる時期に調査を行っていただいたと感じている。今後、この調査等を踏まえ、子ども達の意見を高校再編に生かしていただきたい。
- ・前回の再編で統合となった地域の状況について、マイナス面ばかりではないと思うので次回にでも紹介していただければ、今後の再編統合の参考となるのではないかと。
- ・保護者の経済的な理由により高校への進学等が困難となっている状況について、情報共有のためもう少し具体的に話していただけないか。

【和田 紫波郡校長会会長】(矢巾町立矢巾中学校長)

- ・希望した高校には合格したが、入学金を納めることが出来ず入学を取り消した生徒がいた。このような生徒に対する奨学金の支援手続等をもう少し簡単にできないものかと感じたことがあった。
- ・部活動を熱心に頑張っている生徒がおり、その競技では優れた才能を持っているが、経済的な理由により、高校進学後の部活動が厳しい生徒達にどのような支援をしていけばよいのか思案している。

(次頁に続く)

【杉本 盛岡市中学校長会会長】（盛岡市立松園中学校長）

- ・希望する高校には合格したが、期限までに入学金の用意が出来ないため、高校側に事情を説明した後、入学を認めてもらった事例があった。また、高校へは進学したが諸会費等の滞納が続いている生徒がいるとの話も聞いている。各家庭の状況を確認し、生徒一人ひとりに声をかけていかないと高校進学もままならないということを実感した。教育行政のみならず社会福祉とも連携し対応していかねばならないと感じている。